

前 奏 黙想	讃美歌 280 わが身ののぞみは
讃美歌 12 めぐみゆたけき主を	聖餐式
祈 禱	讃美歌 207 主イエスよこころ
主の祈り 564	入会式 日本基督教団信仰告白
聖 書 詩編 71:1~3	献 金
ローマの信徒への手紙 1:17	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
讃美歌 267 神はわがやぐら(ルター作)	黙 禱
説 教 『神の義と福音』	讃 詠 545 父のみかみに
祈 禱	祝 禱 後 奏

宗教改革記念日は10月31日。1517年の同日、修道士M.ルターは「贖宥に関する95箇条の提題」を公にした。「贖宥状(免罪符)」はいわば天国行きの切符で、これに関する提題は、神の救いを売買する教会の姿勢を問うたものだった。ところが「言っちゃいけない」事柄を公にしたルターにももの凄いい圧力がかかり、素朴なルターの「言っちゃいけない」声は益々大きくなった。結果として宗教改革が起こりプロテスタント教会が誕生したが、この出来事は教会の墮落にとって必要な曲がり角だった。

「福音には、神の義が啓示されているが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現される。〔正しい者は信仰によって生きる〕と書いてあるとおりに(マ1:17)」。伝統的な解釈である「罪人を裁く義の神」にルターは苦しめられ、この聖句を憎んでさえいた。パウロが嘆くごとくに(7:23~24)。苦しみつつ日夜黙考していると、聖霊の啓示なのか「神の義によって信仰によって生きる」ことこそ「福音」だと発見する。教会には「神の義」の権能があり、「罪の赦し」を独占し、絶大な権力をふるっていた。ところがルターは聖書の言葉を教会よりも深く掘り出し、「言っちゃいけない」ことを公にした。

「恵みの御業(義)によって助け、逃れさせてください。あなたの耳をわたしに傾け、お救いください(詩編 71:2)」。ルターはこの詩編に自身の苦悩を重ねた。そんな祈りの中で「福音に啓示された神の義(マ1:17)」が啓かれ、数年をかけて「神の義」とはそのまま「イエスの十字架」だという確信に辿り着く。ルターは力強く語る。「信仰は我々のうちにおける神の働きである～信仰とは神の恵みに対する我々の生きた大胆な信頼である(『ロマ書序文』)」。福音には、神の義が啓示されている(1:17)。福音とはダイナミックに起こされる「神の働き」。私たちは、それを大胆に信頼する信仰に生きる。

使徒パウロや宗教改革者ルターには「辛気臭い」所があるが、同時に揺らぐことのない「明るさ」も感じる。この明るさはイエスのそれじゃないか。言葉やふるまい、ふとした表情にも「神の義」が啓示されていたイエスの明るさ。十字架という絶望に陥ってさえも、傷だらけの体に神の義が啓示されていたのではないだろうか。十字架こそ、存在のもっとも奥にある、福音という光ではないか。

ロマ書に関してルターが語った「我々の大胆な信頼」とは何であろうか。見通しのない所でも、可能性が見えない所でも、人間的な解決策がない所でも、キリスト者は「我々のうちに働かれる神」に対して大胆に信頼する。「福音は～初めから終わりまで信仰を通して実現される(1:17)」のだから、いくら絶望しようとも、私たちには福音に対する大胆な信頼があり、イエスの明るさを伴っている。

ルターは苦悩しながら祈り、この詩編を噛み締めた。「常に身を避けるための住まい、岩となり、わたしを救おうと決めてください。あなたはわたしの大岩、わたしの砦(詩編 71:3)」。病や死、圧迫や孤独で私たちが揺さぶられようとも、この心身の内には揺らぐことのない「神の大岩」がある。「大岩」とは「わたしを救おうと定めた」神の義による十字架。私たちはこの十字架の恵みを大胆に信頼する。

「福音には、神の義が啓示されている(マ1:17)」。福音、「幸いのおとずれ」「答えのおとずれ」。パウロやルターを仰ぐのではない。聖霊をこの身一杯に受けて「答えのおとずれ」を自分の手で掴む。

神の義 福音 十字架 信仰 四つの単語を縦横に置き換えてみるだけで ルター言葉になった神の裁きがあるにしても御手の内に隠されている 裁きは避けられなくとも それ以上の十字架が本日は礼拝の中で、田中稔さんと田中まち子さんの入会式をおこない、八ヶ岳教会という「キリストの体」の新たな姉妹としてお迎えします。次主日 11/3 の礼拝後に役員会、カレーの日です。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3
 連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008
 eメールは komechan.olive@gmail.com HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。